

のことを云ひ梅辻勘解由、對馬儒臣岩瀬勘平、又近藤重藏などのものがあること前に言ふた如くである。近藤重藏については黄葉夕陽村舎詩に收めてある「得近藤君蝦夷書却寄五首」を思ひ起すところである。

かやうにして、さきにも述べた、如くに、茶山の交友は廣く、茶山の西備にかくれてゐたと云ふも、其見聞知見の割合に廣いものであつて、これは福山藩の氣風などを考へる上に於ても餘程注意すべきものであらうと考へたのである。

## 研究の棗

# 日本古建築研究の棗 (第二回)

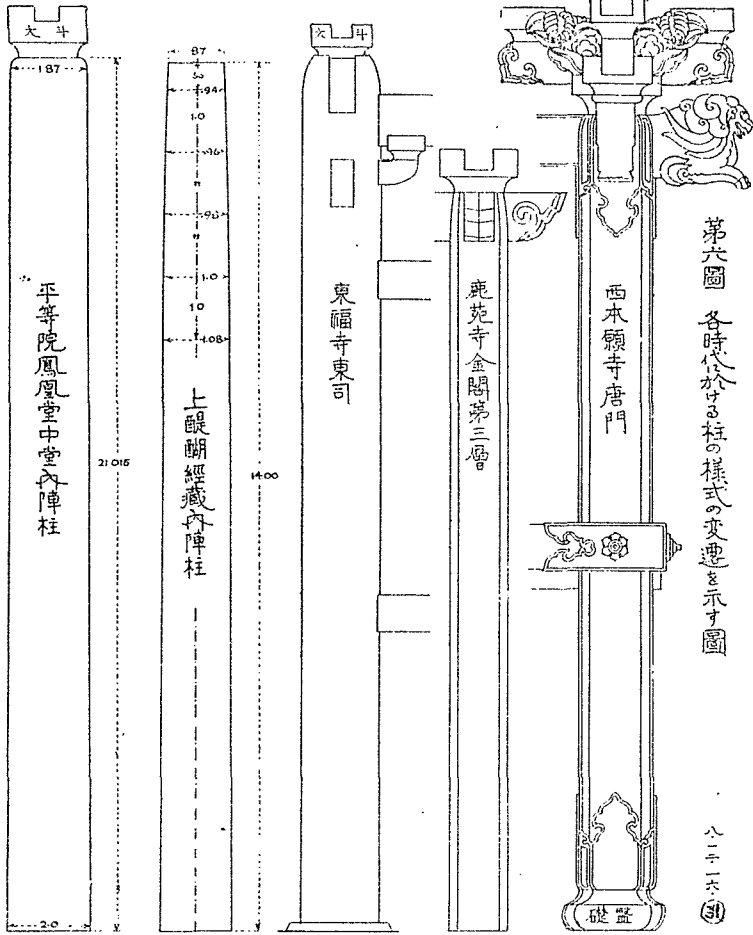
工學博士 天 沼 俊 一

### 第四 柱

柱は其斷面が(一)圓(二)正方形(三)多角形の三種ある。

(一)圓柱。古い時代の圓柱は遺物から見ると、全

長の凡そ下から三分の一位の所で最も張り出して居る。此の張り出しを「肉附」(Entasis)といふ。だから柱は徳利型で、例へば法隆寺西院伽藍の飛鳥時代の建築の柱に於て見る様なものである。此の



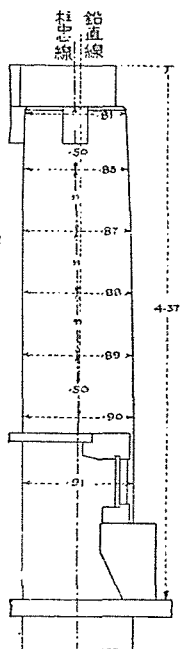
第六圖 各時代に於ける柱の様式の変遷を示す圖

八二六(四)

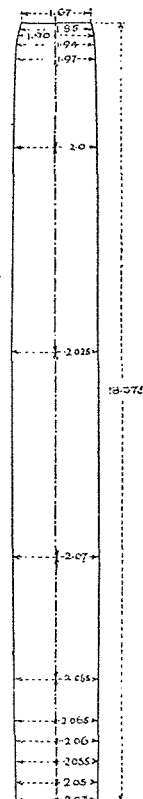
肉のつき様は時代が降るに従て漸く少なくなり、平安時代後期に入ると最早ない。第六圖の向て左から五本は飛鳥より平安前期に至る各時代の柱の立面圖であつて、左の二つは飛鳥、第三は奈良前期、次は同後期、次は平安前期に屬するものである。圖に於て明らかな通り第三番目迄は「肉附」が甚だ著明であるが、第四番目になると初めの三つ程膨んで居ないのみならず、最も

各柱記入の寸法は尺毫單位とす。

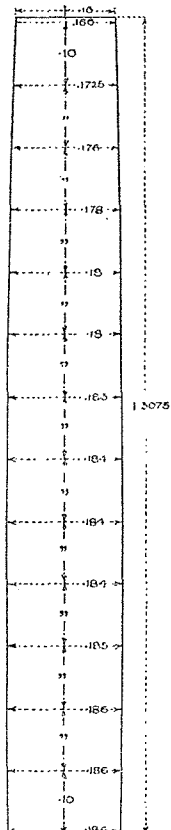
薬生寺五重塔初重四天柱



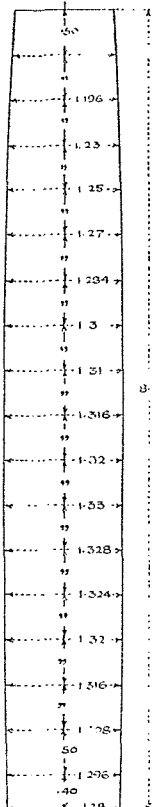
唐招提寺  
金堂内陣柱



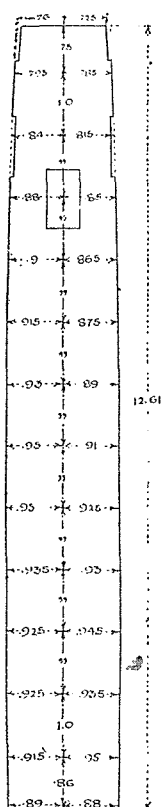
海龍王寺  
五重小塔



法隆寺歩廊



法隆寺中門



膨んだ所は中央部である。も一つ時代が降ると上の方四分の一位が直線でなく外に膨んだ曲線で細くなるのであるが、併し此等は上代に於ける数の少ない現存の建物に就ての観察だから、當初はもつと異つた種類も在つたかも知れない、従て今記した通りの順序になつて居たかどうか勿論判らないが、遺物が亡くなつた今日からは此れ以上の穿鑿は不可能である、以下にも此様な

斷定を記すが總て同様に思はれ度い。

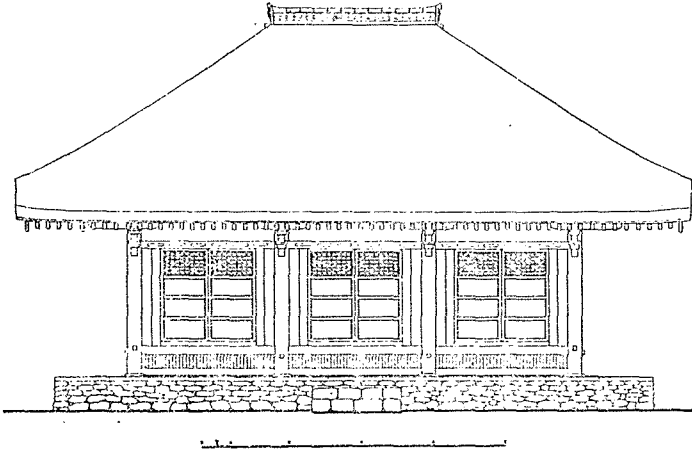
平安時代後期からはもう「肉附」はない。鳳凰堂の柱は其一例であるが、此れは上の方に進む程直線で細くなつて居る、時代が降るに従つて漸く斯様に變つて來たので、即ち極く初めの徳利柱はだん／＼に肉が落ち變化し日本化し、遂に鳳凰堂の柱の様な形——大袈裟に言ふと底面の小さい高さの非常に高い截頭圓錐體——の柱になつたのである。

然るに鎌倉時代になると一種の様式が禪宗と共に支那から這入つて來た。飛鳥時代の様式は奈良時代に唐の影響を受け天平式を現出し、平安前期に於いては密教輸入の爲めに又復多少の影響を受け、同後期に到つて遂に純日本式を大成したが、今度の新式は今迄在つたのとは大分に違つて居る。つまり曲線の應用が非常に多くなつたのである。追々に説明するが例へば海老虹梁・拳鼻・手狹等盛

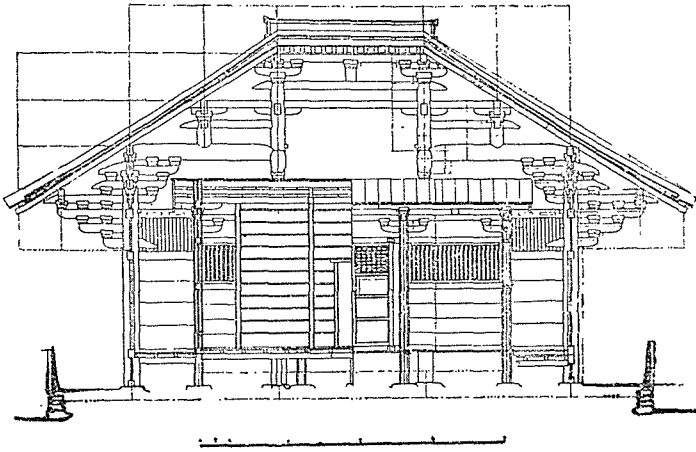
に曲線を入れ出した。斯様な式を我々には「から様」と稱へる。夫れから又別に「天竺様」と呼ぶ式も此時代に輸入された、此れは挿肘木・斗尻に皿斗擬ひの一種の線形(Moulding)のある斗を用ひ、肘木上の斗の配置は不規則なのが多い。京都府宇治郡醍醐村醍醐寺の經藏は「天竺様」の好例である(第七八九、千圖參照)、其柱は第六圖の右から四番目に示した様に上の方1/4位が曲線形に細くなつて居る。「和様」の建築に於ける圓柱は此時代は大概下から上迄同じ太さである。

室町時代になると前にも述べた通り別に新式は出來ずに前時代の様式を踏襲したのである。同圖に其の一例として右から三番目に東福寺東司の柱がある(東司も三門と共に寺傳嘉禎二年の建造。三門は應永年(岡足利義滿が修理したとあるが、様式から觀ると正に應永の再建とすべきである。東司も様式手法が全く三門と同一であるから、此れも應永の再建と認められる。故に室町時代とするのが至當)此れは下から上迄で同じ大きさだが、上部に近く急劇に曲線形に狹まつて居る、此の狹まつ

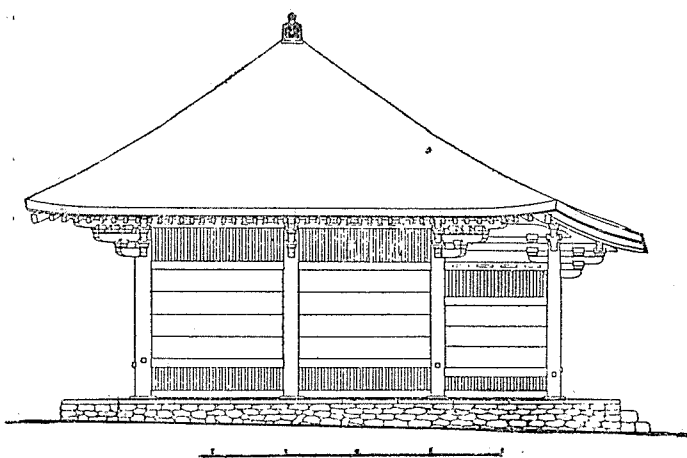
第七圖 醍醐寺經藏正面



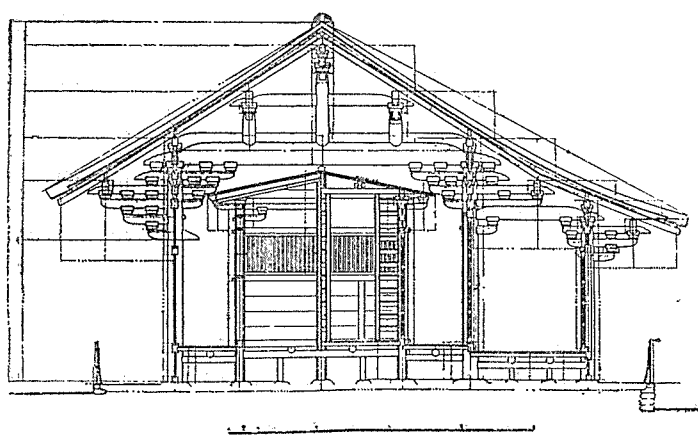
第八圖 醍醐寺經藏橫斷面



第九圖 醍醐寺經藏側面



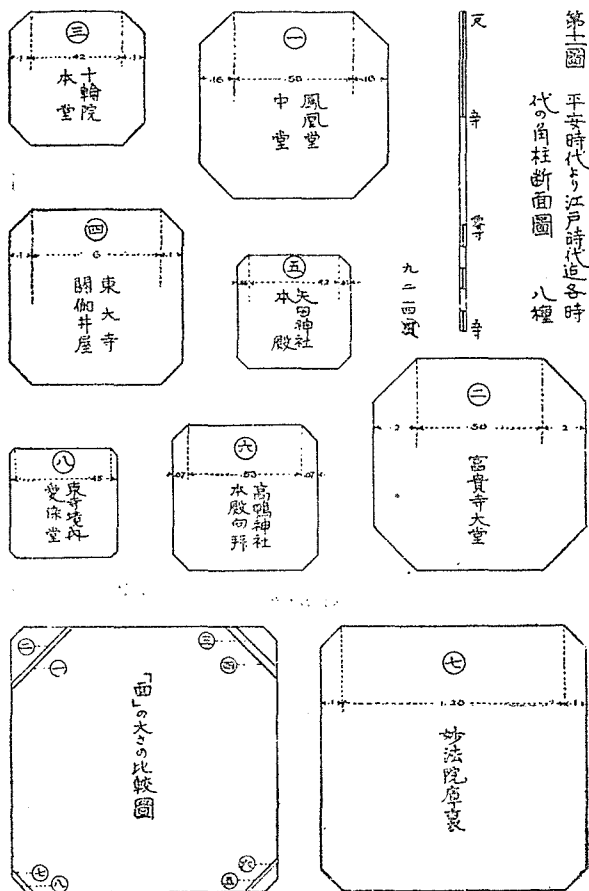
第十圖 醍醐寺經藏縱斷面



てゐる部分を「チマキカタ粽形」「チマキ普通粽」といふ。唐招提寺金堂や鳳凰堂の柱等も粽があるといへばいへる、醍醐寺經藏の夫れは大變に長い粽とも言へる、併し、粽が著しくなるのは鎌倉以後で、今記した東司の

は勿論、次の金閣や西本願寺唐門等には立派な粽がある、降て江戸時代の建物には間々上方に於いて急に折れた様ないやな形がある。以上説明した通り同じ圓柱でも時代によつて随

第十一圖 平安時代より江戸時代迄各時代の角柱断面圖 八種



分いろゝの變化があるから、其變遷を知つて置かなければ研究は六つかしい。(二)方柱。正方形の柱はないので必ず太いか細いか「面」が取つてある。「面」とは隅切りになつてゐる所を指すので、「面」をつくる事を「面を取る」といふ方柱の用ひてある一番古い建築は平安後期のもので、以降各時代に皆ある。第十一圖に八種の例を擧げて置たが、

①は鳳凰堂、②は豊後富貴寺大<sup>オホゾウ</sup>堂(大分縣西國東郡田

築村大字蔭所在)

の夫れで。共に可なり大きな面である、③・④は鎌倉、⑤・⑥は室町、⑦は桃山、⑧は江戸時代の實例である。此れ等は單に各時代一つづゝの例ではあるが、左下の同じ尺度にかいた比較圖に就て見ると時代の推移による面の大きさの變化が大體判る、即ち時代が經るに従て面の巾は漸く狭くなるのである。

面巾は新しい時代の建築では「十面取」とか「七面取」とかいふ割出しの方法がある。「十面取」とは面の見付が柱全體の大きさの凡そ  $\frac{1}{10}$  にする事で、「七面取」は凡そ  $\frac{1}{10}$  である、其「十面取」を又半分にしたもの即ち凡そ柱巾の  $\frac{1}{20}$  のものを「五厘面取」といふ(日本建築辭彙による)。第七圖で見ると④は「七面取」より少し小さく、⑧は面巾が僅に三分だから「十面取」より小さく「五厘面取」より大きい事になる。

面は上記した「切面」<sup>キリメン</sup>の外、「几帳面」<sup>キチャウメン</sup>「唐戸面」<sup>カラト</sup>等がある、前者は多く桃山江戸時代の建物の柱等に用ひられてゐる、第六圖の最右端西本願寺唐門の柱には此種の面が取つてある、後者は唐戸の框等に用ひらるゝものである。

(三)多角柱。多角といつても多くは八角形で重八角圓堂に用ひられて居り、奈良時代後期の建築から既にある。大和五條町附近にある榮山寺八角圓堂の夫れは其一例で、法隆寺夢殿・興福寺北圓堂等の夫れは何れも八角形である、是等は元來建物が八角形だから夫れに相應する様に柱も自然八角にしたのである。

附。礎盤。鎌倉時代以降柱が礎石と接する所に「礎盤」といふものを入れる場合がある、第六圖の右端の柱の下に於いてある一種の形式のものが即ち夫れである。中村工學博士は此の形のものをも根石又は沓石、其下にある薄き盤(礎石の一部か)を礎盤と呼



んで居られる、此方が如何にも適當と思はれるが普通今記した形のもの礎盤といひ一般に夫れで通用して居るから、今は矢張從來の名稱に従つておく。偕て此の「礎盤」は石から出来てゐる事もあり木の場合もあるから、石なら礎石の一部と見られ、木なら柱下端の變形即ちベース(Base)と見られる、兎に角此様式のもの鎌倉時代以前にない宋式だから、必ず「から様」であるべきである、然るに江戸時代になると此れにも和様から様が出来るが、夫れは無理に作つて勝手に名をつけたのである。

礎盤を訛つてハ、ハ、と發音し「双盤」「草盤」等あて字をしてある、「双盤」では無意味であり「草盤」に至つては全く何だか譯が分らない。

### 第五 斗 拱

斗拱は普通「斗組」・「組物」等と呼び、建物の軒又は内部天井に近くある細長い木と四角な木と組

み合せたものをいふので、全體としては一種の「持送り」(Compound Bracket)である、細長い木を「肘木」、四角な木を「斗」といふ、先づ肘木から記す

(一)肘木。肘木は上方の荷重を支へる爲めの横木で、様式から分類すると先づ次の三種になる

(イ)雲肘木。(ロ)肘木。(ハ)花肘木。  
其用途からいふと

(イ)通肘木(斗組と斗組との間に渡れる長き肘木)。(ロ)挿肘木(柱より直角に前方に出でたるもの)。(ハ)粹肘木(二つの肘木が直角に交又せるもの)。(ニ)秤肘木(壁行して前方に遊離し斗の上に乗る其の上に三つの卷斗ありて上の荷重を受くるもの)。(ホ)實肘木(雲肘木といふも飛鳥時代の雲肘木と混同するが故に今此の名稱を用ひず。斗組の最上部に在りて丸桁を支ふるものない)

の五種類ある。第十二圖及び第十八圖に此等が圖示してある。併し圖では中々分りにくいから、散步の序に通りがりの宮か寺へよつて軒の組物で研究をしておく必要がある。

雲肘木は其輪廓が雲形であるからで、法隆寺。



添へ物のある事で、此れは何の爲めにあるかといふと、少しも實用にはなつて居ないから、單に裝飾と兼て幾分か肘木を力強く見せる爲めである。

㊦は實物に於いて少し注意すれば見えるが、㊧のは木が古びて居るせいも多少あらうが、極く近くへよつて氣をつけないければ分らない程薄いから、當初に於いても斯様な薄さでは在つても無くても同じ様なものであるが、兎に角斯様な添へ物を肘木につける事は飛鳥より奈良前期迄あつて其後跡を絶つてしまつたと思はれるのである。

㊨は肘木の下端に沿つて面が取つてある。虹梁や桁の面取りは奈良後期からあるが、肘木の面は平安後期に於いて初めて見るので、鳳凰堂許りでなく曩に記した富貴寺大堂の夫れの如きも同様で此れも亦方柱の面と同じく時代の降るに従ひ漸く面巾は細くなつて行くのである。

㊩になると下端の曲線は圓の一部から出來て居

る、圓の一部即ち弧又は夫れに近い曲線が用ひられるのは鎌倉以後に限るので、斯様な形のを「から様」と呼び、此に對して以前からある形のを「和様」と呼んで居る。

㊪は異形肘木の一例として示したので時代は鎌倉、㊫は室町で㊬は桃山である、㊭のは木口と下端とが夫れ／＼垂直及び水平線より成り、其出合ふ所の曲線は弧である、斯様なのは圖で見ても實物で見ても兩端が下つた様で、形は甚だ宜しくない。新しい時代になると總て木割法といふ規則の様なものが出來てしまひ、總て此規則に當て箴め此規則を無視して自由な意匠をすると建築を全然知らない様に悪口を言ふ、だから到底うまい建築は出來なくなつてしまつた、其木割なるものは如何に馬鹿氣たものであるかは、斗ユの説明をした後に此㊮に就て少しく記して見る。

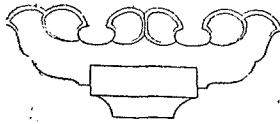
第十三圖には花肘木を九種掲げた、花肘木とは

第十三圖 花肘木類九種

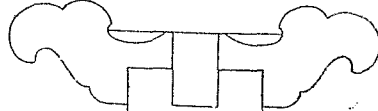
第五卷

研究の葉

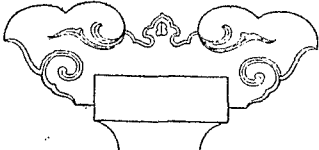
日本古建築研究の葉



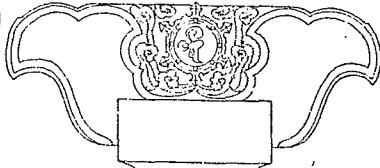
尾道市、浄土寺寶基の要入部花肘木  
44. 10 23



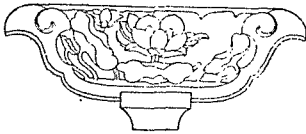
伊豫、大山寺本堂引縁内郭花肘木  
44 3 2



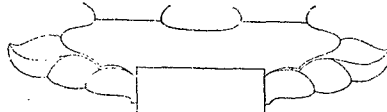
法隆寺、南大門内郭南側中央花肘木  
43. 11 17



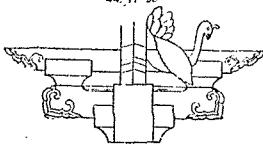
大加、福成院本堂正面中央花肘木  
44 11 10



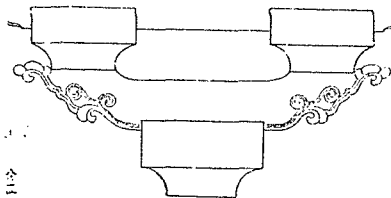
大加、文殊院境内白山神社本殿花肘木  
44. 11 20



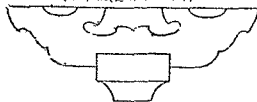
瑞智、浄土寺境内八幡社拝殿御邊花肘木  
42 2 12



京都、西本願寺唐門花肘木  
(京都府歴史博物館より写す)



大加、不逞寺南門中央大梁殿上花肘木  
44. 11 2



近江、延暦寺文殊塔階上花肘木

全二五圖

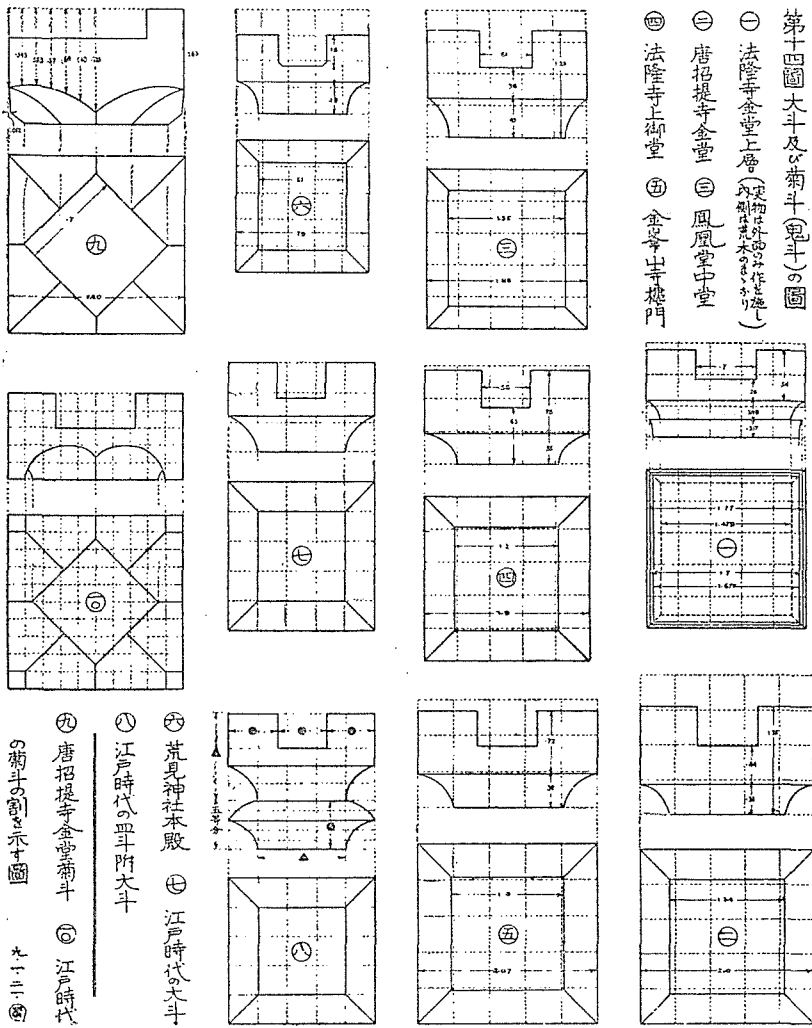
第二號

一四三 (二六七)

肘木の下端が滑かなる曲線から出来て居らずに、ずつと複雑ないろくの曲線の集つたものから成つて居るもので、此等も鎌倉以前にない形式だから「から様」の肘木や斗と同じく、若し建造物に斯様な形のものが用ひられてあつたら、少なくとも夫れ等丈けは鎌倉より古い事はないので、其上他の部分もよく調査し皆同時代と認定し得たら建物全體鎌倉以後といへるのである。

第十四圖 大斗及び菊斗(鬼斗)の圖

- ① 法隆寺金堂上層(支物は外内二作を造り、均等に木を配りあり)
- ② 唐招提寺金堂
- ③ 鳳凰堂中堂
- ④ 法隆寺上御堂
- ⑤ 金峯寺出雲樓門



- ⑥ 荒見神社本殿
- ⑦ 江戸時代の四斗附大斗
- ⑧ 唐招提寺金堂菊斗
- ⑨ 江戸時代の菊斗の割を示す圖

(二) 斗には左の數種ある。  
 (イ) 大斗。(ロ) 卷斗及び方斗。(ハ) 雲斗。(ニ) 菊斗。  
 大斗とは柱の上に直に乗つて居る大きな斗で第六圖の鳳凰堂や東司に柱の上にある種類を指していふ、即ち西洋建築の柱のキヤピタル(Capital)に相當する部分である。

此も時代によつて随分形は異なつて居り、且つ時代によつて定まつた標準はないが、巾さと高さとの比は或る程度迄參考になる、夫れで第十四圖の①から⑧迄に各時代の斗を圖示したが、分り易くする爲め先づ斗の平面の縦横を五つづゝに等分し總計二十五の小正方形に分ち、立面の横は勿論平面と同じく五つ、縦は横の1/5のの長さを以て斗の高さに關せず三つ又は四つに區切り、斗の立面が全く内に含まるゝ様十五乃至二十の小正方形をかいて見る、さうすると斗の巾さと高さとの比が分り易くなる。此圖は其比を見る爲めに作つたもので、此も各時代の澤山の實例から平均數をとる餘裕が無かつたから、僅に各時代一つづゝを示したに過ぎない。

圖に於いて①は飛鳥、②は奈良、③は平安、④は鎌倉、⑤は室町、⑥は桃山、⑦・⑧は江戸時代のである。①は大斗のみ考へると高さは割合に低

いが、下に薄い板がついて居る。此板は大斗から繰り出してあるのだから無論其の一部分であるが別に「皿斗ハシラ」といふ名稱がついて居る、皿斗附大斗は飛鳥時代以後長く跡を絶つてしまふ。尤も鎌倉以降は醍醐寺經藏の斗に於いて見る様な形のはあるが、此は斗線の曲線を下端に近く曲げて先の方を直線にしたと見る方が適當で、殊更「皿斗」といふべきではあるまいと思ふ。だが鎌倉末期になると此直線の部分が一種の皿斗様のものに變化する夫れが發達して遂に江戸式の皿斗様のものがついた斗になるが、此の種の皿斗は飛鳥時代の皿斗の系統でなくて、全く宋式建築に於ける斗線の手法の系統と見るべきである。併し今別に適當な名も思ひつかないし、皿斗で通用して居るから夫れに従つておく。⑧に江戸時代の皿斗附大斗を描いておいたから、順序は少し狂ふが次に説明をする。

先づ平面を例の如く縦横とも五等分し二十五の

小正方形を作る、そして總巾の  $\frac{3}{5}$  を大斗及び  
 皿斗の「斗尻」の巾並に大斗の高さとする(▲印)、  
 總巾を三等分し(●印)其一つが肘木の巾になる、  
 大斗の高さ即ち▲印を五分分し下の二つを「斗綫」  
 の高さとする、皿斗の高さは總巾の  $\frac{1}{3}$  (●印)、  
 夫れを更に五分分し上の二つ丈の厚さは外に膨  
 らませ下の三つは内に凹ます、さうすると㊦が出  
 来るが随分思ひ切つたまづい形である。此れを㊧  
 と比べると何れがいゝかは誰れにでも分る。新築  
 のお宮等へ行つて見ると向拜柱の上によく此種の  
 斗が用ひてある。

㊦から㊧迄は各時代一つづゝの例であるから、  
 總てが此通りとは行かないが、これで大體の見當  
 はつくと思ふ。㊦は江戸時代「から様」大斗の木割  
 法による割り出し方で、高さ及び斗尻の巾は其一  
 邊の長さの  $\frac{3}{5}$  にしてある。

無論大斗は常に平面は正方形であるが、時とし

ては八角形や圓形のものもある。八角形のは萬壽寺愛  
 染堂(京都市東福寺境内所在、八  
 角四堂、單層、鎌倉時代)の八角柱の上にある。  
 圓形のは東福寺三門上下層及び同寺東司の「大瓶  
 束」(大瓶束の説明  
 は後に記す)の上にある。

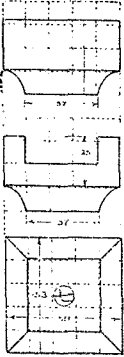
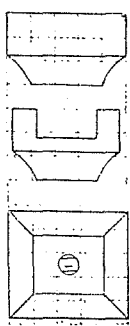
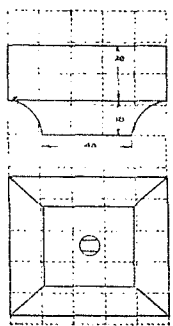
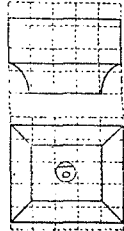
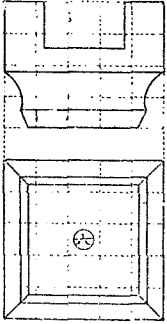
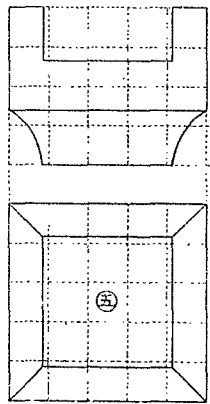
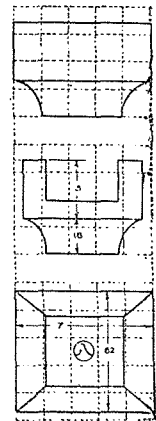
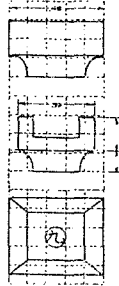
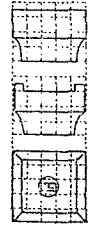
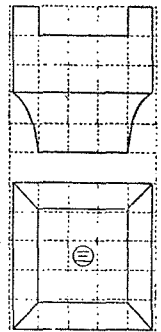
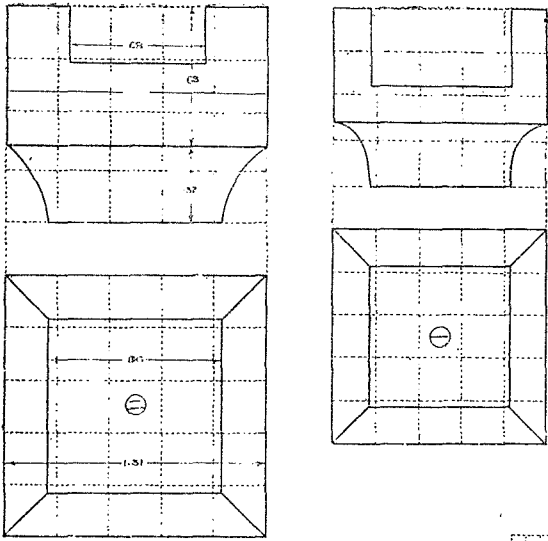
卷斗・方斗。大斗の上に肘木が乗り其肘木の上  
 には普通三つの小形の斗が並んで居る(第十二  
 圖參照)此小  
 形の斗を「卷斗」といひ多少長方形である。肘木が  
 直角に交叉してゐる場合には自然五つの卷斗があ  
 るが、中央即ち交叉點のは正方形である、此れを  
 「方斗」といふ、故に三斗枰肘木の上には卷斗四つ  
 と方斗一つあるのである。要するに卷斗と方斗と  
 は同じもので、たゞ其ある位置により名前が違ふ  
 丈けであると思つて差支ない、此れも大斗と同じ  
 く時代が下るに従つて背が低くなる傾向がある。

第十五圖に於いて㊦は飛鳥、㊧は奈良、㊨は  
 平安前期、㊩は同後期、㊪は鎌倉、㊫は  
 室町、㊬は桃山、㊭は江戸時代のである。右

第十五圖 飛鳥時代より江戸時代までの斗の比較圖 九二五圖

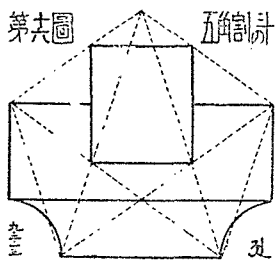
元 尺 縮尺 寸 寺

- ① 法隆寺金堂
- ② 法隆寺食堂
- ③ 當麻寺西塔
- ④ 室生寺五重塔
- ⑤ 鳳凰堂中堂
- ⑥ 上醍醐經藏
- ⑦ 興福寺三重塔
- ⑧ 南法華寺三重塔
- ⑨ 鹿苑寺金閣
- ⑩ 荒見神社本殿
- ⑪ 北野神社本殿
- ⑫ 江戸時代の斗





の内①・②・③・④・⑤・⑥は高さが巾の $\frac{4}{5}$ 。⑦は當麻寺西塔(三重塔婆 奈良時代後期)にある澤山の斗の内、木口で高さ巾とが全く同一のもので、斯様な比例のも存在する事が分る爲めに掲げたが、勿論斗としては高過ぎて形は決してよくない、此れは特別の例である。鎌倉時代になると曩にも一寸記した通り外國の影響を受けて皿斗サラト擬ひのようなものゝある⑧の様のが出来た。降て江戸時代には例により木割できめられ $\frac{3}{5}$ の比例となる。其他中間各時代の割合は煩はしいから一々記さない故圖に就て見られ度い、



尤も江戸時代の斗の比は和様から様で異なる。又此時代には「五角割の斗」といつて正五角形を基礎として割り出す法がある、参考

の爲め此所に圖示しておいたが、此様な幾何學的方法で割り出したのは元より完美なものとは言へない。

此處で肘木の説明の内に一寸記した「から様三斗四六の割」(第十二圖の⑤参照)とは如何なる方法であるかを記して見る。

割方法式

柱グイト 大斗グイト 大斗ノ八分

中柱徑ノ四分ノ五、セイ巾ノ六分

巾ヲ十等分シセイヲ五分シ(即チ六四ノ割)上二ツヲ肘木カキ中一ヲク、ミ

下二ツヲトクリトス

枰肘木ワカヒシキ 中斗ノ三分ノ一、セイ二分増。

卷斗マキト 中斗ノ巾六分、セイ巾ノ六分。

實肘木サネヒシキ 枰肘木ノ下バ四方。

丸栱グワシクワ 巾タルキ下バトタルキセイトノ和。

セイ巾ニ其三分ノ一ヲ加へタルモノ。

極タビキ

下バ卷斗巾ノ十六分ノ五、セイ下バニ

二割増、小間ハセイニ等シ。

但シ一枝トハタルキ下ハ一本トアキ

小間トノ和ヲ唱フ。

隅木スミキ

ハ極四本ノ割

をここで假に一枝七寸と定めると

極 セイ三寸八分一厘八毛、下ハ三寸一分八

厘一毛。

卷斗 巾一尺〇一分八厘一毛、木口九寸二分五

厘五毛。

セイ六寸(巾ニ六分弱トル)。

といふ寸法になる、さすがに高さは六寸にしてあるが何厘何毛迄算出して見た所で、實際の施工に當ては役に立たない。江戸時代でも元祿以前のもの殊に寛永慶安頃迄のは、桃山時代の餘影があり中々よろしいが、新しくなると一定して居るので全くの素人にも直ぐに判断がつく。

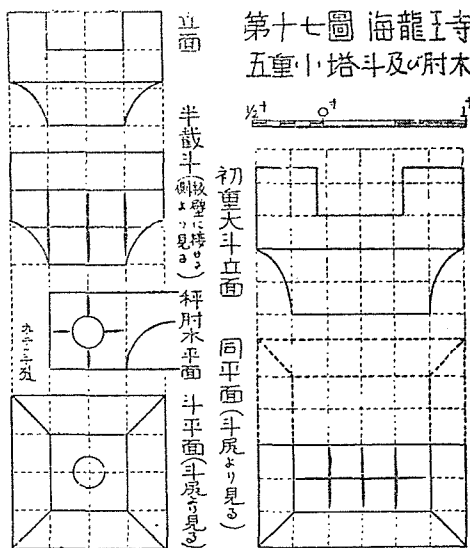
建物の隅行にはよく卷斗を長くした形の斗が用ひてある、これを「延斗ノビト」といふ。夫れから多寶塔の上層の指肘木の上に在る斗は、四隅のものを除く他は其平面が平行四邊形である、多寶塔の上層は平面が圓形であるから、自然斯様な形になるのである。

大斗でも卷斗でも下端に近く曲線形に皆列つてあるが、其の列つてある部分を「斗線トゼリ」といふ。斗線の曲線の形も時代によつて随分異なつて居る、第十四・第十五圖は小さいから曲線の工合は判らないが、夫れでも飛鳥と江戸とは随分の差が見える、そして江戸時代になると、此曲線は矢張圓の一部になる。

奈良時代前期に屬する海龍王寺五重小塔(奈良縣保佐村大字法華寺所在。塔は今奈良帝室博物館出陳。)

の大斗及び卷斗は、此圖の通り斗尻其他に墨で縦横に線が引いてある。此塔は元來が小さな工藝品だから従て壁付の大斗も半分

第十七圖 海龍王寺  
五重小塔斗及び肘木



で貼りつけになつて居るが、大斗巻斗の割り出し方法がよく分る。千二百年の昔でも斯様にして各部の割合をきめたものと見える。

雲斗は雲肘木と同様飛鳥時代に限るので、雲肘木の用ひてある建築には皆ある、第十二圖の(一)は法隆寺金堂の例。同圖の(二)即ち觀菩提寺本堂(三重縣阿

山郡烏ヶ原村)に用ひられて居る鯨の尾の様な異形の斗もあるが、名のつけ様が無いから假に花肘木に倣つて「花斗」としておくが、此れ等は雲斗の一種とするのは穩かでない、且つ雲斗から變化したものは思はれない、寧ろ第十三圖の左下に掲げた延曆寺文殊樓の上層の斗の方が雲斗の一種と見られる。

菊斗 普通鬼斗といふ。角肘木の上に他の斗と同じ見通しになる様に特別の形に作られたる斗である。隅肘木は隅行(即ち四)に出て居るから、普通の斗であつたら、他の斗の面と見通しにはならずして45°になる、故に斗縁を特別の形に作つて45°になるのを避る、飛鳥及び奈良前期では未だ斯様なうまい考へは出なかつたが、奈良後期に於いて初めて用ひられ、今日に至る迄で此れ以上の工風はつかないと思へて矢張同じものを用ひて居る。

第十四圖の(一)は唐招提寺金堂の菊斗であるが、

鎌倉末頃から四隅が漸次下に降り遂に四隅に各一つづゝの小正方形が出来る様になる。④は江戸時代の夫れで相不變木割で行く、即ち高さは總巾の $1\frac{1}{2}$ 、四隅の下端の小正方形は一邊の $1\frac{1}{10}$ だから丁度總巾の一割づゝ、即ち其面積は總面積の $\frac{1}{100}$ となる。尙ほ斗線と側とを境し中央で「茨」(Crest)をなせる曲線の最高部と「含」(フクレ、肘木が斗に入らむ所の凹所) 下端との間は高さの $1\frac{1}{5}$ 即ち總巾の $1\frac{1}{10}$ である、つまり巾の割に背が低く過ぎるから、唐招提寺のと比較して見ると随分の差がある。

古代に建てられた一字の堂又は一基の塔等に用ひてある總ての斗をよく調べると、一つとして同じのがないと言つてもいゝ位形が皆違ふ、高さも巾さも斗線の曲線も皆違ふ、過ま大きが等しいと思ふと斗線の高さに差がある、又斗線の曲線も前後異り左右同じからずといふ有様である。かういふ工合に皆異なつて居ても、元來斗等は手に取つ

て一つ一つ比較して見るものではない上に、一つの建物に用ひてある總ての斗は意味が同じであるから、皆同一に見え相互の僅かの差等は分るものでない、斗線の高さや曲線の僅かの差の如き小事は顧慮する必要がない、つまり大體さへ似て居れば建物全體としてよく見えるから夫れで充分であるのみならず、反て氣のつかない微妙の間に變化があつてよく見えるのである。斯様なのは斗に限つた事ではなく、軒先の瓦の文様等にもある、甚だしいのは五重塔の様な四角な建築で、四方の斗の数が異つてゐるが、夫れでも決して言はれて數へて見る迄は氣がつくものでない。然るに近世になつてから木制法などゝ定めてしまつたので、斗も肘木も全く同一で何れも皆鑄型に入れて造つた様になり、綺麗な事はたしかだが餘りきまり過て面白くない。

### (三)斗拱の種類

(イ) 舟肘木。(ロ) 大斗肘木。(ハ) 三斗。(ニ) 出組。(ホ) 二手先。(ヘ) 三手先……………

右の通りで、三手先以下六手先迄は實例がある。

建物の構造形式を記載する場合には「斗拱から様三斗組」又は「斗拱和様三手先」等の文字が常に用ひられる、此等の意味が分らないと研究上支障があるから以下順に説明をする。

舟肘木。斗拱の最も簡單なもので、たゞ柱の上に肘木を乗せた丈いで斗は一つもなく、其肘木で直に上の桁を受けて居る。第十八圖の㊦は平安時代後期に屬する富貴寺大堂の側柱(建物の四周の柱をかくいふ)の上部に用ひられて居るもので、私の知つて居る最古の實例である。舟肘木に限つて必ず「和様」になつて居る、これが「から様」になつて居たら不恰好で見られたものでない。

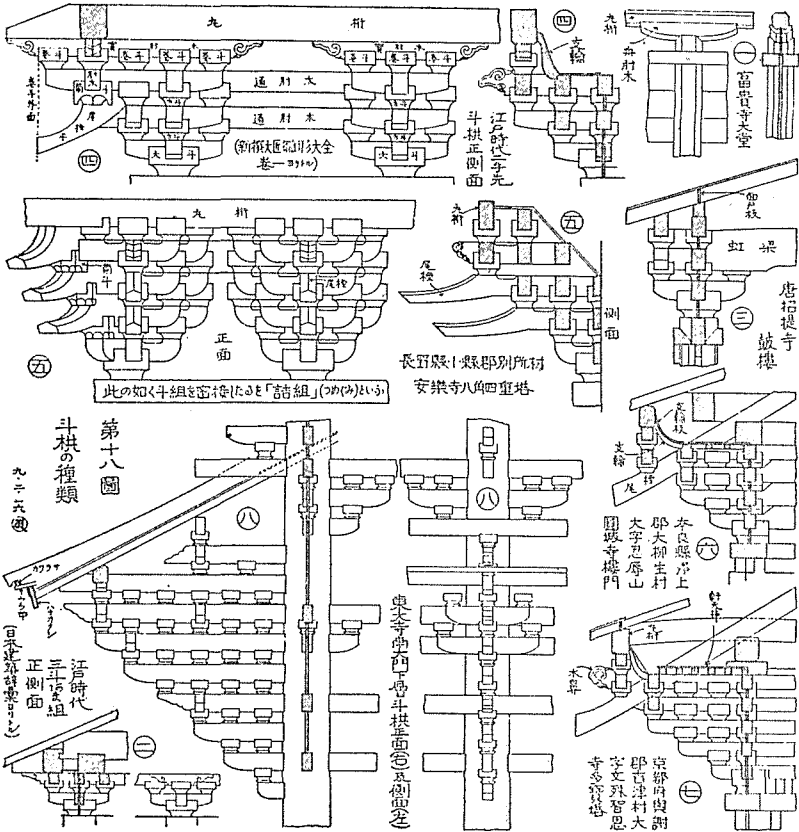
大斗肘木。第十二圖の㊧に圖がある、即ち室生寺金堂の夫れ。此はつまり舟肘木の一つ込み入つ

たもので、柱の上に大斗を置き其上に肘木をのせそして桁を支へて居るのである。此様式は既に法隆寺傳法堂・同食堂・新藥師寺本堂(奈良市所在)等奈良時代後期の建築に盛に用ひられてあるから、現存の實例からいふと反て舟肘木の方が新らしい。

三斗。第十二圖の㊨・㊩・㊪の様な組み方で圖に明らかな通り大斗肘木の肘木の上に三つ小さな斗を竝べ、其三つの斗で㊫の様に直に桁を支へるか、又は㊬・㊭の如く三つの斗の上に更に實肘木を置き、夫れで桁を支へたものである。三斗組の最古の實例は法隆寺西院歩廊及金堂内陣の斗拱に於いて見る事が出来る。

出組。三斗組の中央の卷斗から直角に肘木が出て、其端に斗が乗り、此出た斗の上に更に三斗組一具を置き、其出た三斗で上の桁を受くるもの、第十八圖の㊮に唐招提寺鼓樓の出組がある。

二手先。出組のも一つ出たもの、つまり柱直上



の斗組を勘定に入れないうで、其次から桁を支へる斗組迄敷へて

幾手先といふ、だから一つ目の斗組で桁を受けて居れば一手先

即ち出組で、二つ目なら二手先

(第十八圖の榑に江戸時代二手先の正側面あり)、三つ目の時は

三手先……である、だから

三手先 は二手先のも一つ出

たものである(第十八圖)。奈良時代の

の大建築は大概三手先であつて

此以上複雑な斗組は未だ知られ

なかつたのである、創立當時の

東大寺大佛殿でも三手先を用ひ

た(信貴山縁起繪巻に治承焼失以前の

佛殿の圖があるから夫の見れば分る)

に過ぎなかつた。

四手先。多寶塔の上層の斗拱

は殆んど總ての場合に四手先。

古いところでは高野の金剛三昧院のも石山寺のも皆なさうである、尤も鎌倉以前の多寶塔は遺物がないから確言は出来ないが、既に平安前期に於いて初めて多寶塔と名づくる様式の建築が支那から輸入されたのを見ると、あの深い軒を支へる爲めには四手先でなくては納りがつかなくなつたらう、

果して然らば四手先は此時代に初まつたと言へる第十八圖の㊦に智恩寺多寶塔(京都府興謝郡吉津村大字同十年(文龜元年)にかけて落成)の文殊所在。明應九年より上層の四手先の圖がある。

五手先の實例は總ての多寶塔の上部の一部にあるが、一つの建築が全部五手先になつてゐるのがあるか無いか知らない。

六手先。此は東大寺南大門に用ひてある、此門は五間三戸重層で斗拱は上下層とも六手先、第十八圖の㊦は下層斗組の正側面である。創立は奈良時代であるから三手先であつたらうが、今のは正治二年再建のもので、醍醐寺經藏と共に鎌倉時代

の「天竺様」の好例である、「天竺様」の都合のいゝ點は、挿肘木を重ね手先を増して深い軒を樂を支へ得るにある。

斗は普通木口を横に向けておくから、正面からは木口は見えないのである、然るに古い時代には「木口斗コシテマス」といつて、形は普通の斗も少しも變らな

いが、たゞ木口を外に向けた斗を用ひた、だから少し古くなると建物の歪の爲めに含フキの兩側の出た所がかけてしまう。木口斗は三月堂の後半部(鎌倉時代に補加した前)にあるから、奈良時代後期迄(半部即ち禮堂ではない)此の手法が行はれた事が分る。併し此種は無論破損し易くもあるし、見たところも餘りよくはないから、此後は全くなつて了つたらしい。

第十二圖の㊦・第十三圖の淨土寺八幡拜殿(右)三番・不退寺南門(右)の、様々に、肘木の上に普通三つあるべき斗が二つ外ないのを「二ツ斗フタツド」と呼ぶ、から様肘木に「二ツ斗」を用ひた例は京都市では一

寸思ひ出せないが、丹後智恩寺・多寶塔・奈良東大寺・大湯屋・大和吉野藏王堂・樓門・河内觀心寺本堂・播磨鶴林寺本堂等にある。

夫れから斗組に「あま組」「つめ組」といふのがあ  
る。「あま組」の一例は第十八圖の㊦に示したやう  
なので、つまり普通の三斗組から肘木が直角に出  
て、其先端に實肘木サネヒデキを含める卷斗が一つ乗り、其  
實肘木サネヒデキで桁を支ふるもの。「つめ組」とは組み方を  
いふのではなくて、同圖㊦の様<sup>⑤</sup>に斗組を密接して  
並べたものをいふのである。

「二つ斗」も「つめ組」も鎌倉以前には決してない  
式である。

\* \* \* \* \*

以上で略ぼ斗組に就ての説明を了つたつもりで  
ある。此の上は實物に就てよく研究をして、時代  
によつて異なる形式の變化を會得すると、斗一つあ  
つても肘木一本でも凡そ其時代を推定し得るに到

るのである。

終りに京都市若くは其附近に在る和様から様・  
天竺様の建築二三を擧げておく。

和 様

八阪神社本殿・知恩院本堂・仁和寺御影堂・醍醐  
寺五重塔・法界寺阿彌陀堂・平等院鳳凰堂。

から 様

東福寺東司・相國寺法堂ハットト・大徳寺法堂・妙心寺佛  
殿・酬恩庵本堂綴喜郡田邊町。

天竺 様

教王護國寺金堂下層の斗拱のみ天竺様にして上層は然らず・醍醐寺經藏・

東大寺南大門長・同大佛殿細部の手法・淨土寺淨

土堂・同本堂淨土寺は兵庫縣加東郡小野村大字淨谷所在

東福寺藏大宋諸山之圖物卷は聖一國師將來と

傳へ、支那の寺の平面・斷面又は佛具其他の圖が

澤山にある、尤も昔しかいたのだから極めて幼稚  
な見取圖であるが、から様・禪宗伽藍の斷面だの、



天竺様の挿肘木を用ひた「鼓臺」だの、太い虹梁を細い挿肘木の鼻へ一つ斗を置いて夫れでうけて居るのだの、種々の圖がある、此れを見ると「から様」「天竺様」などが鎌倉時代に流行しだしたのは如何にも宋の影響だといふ事が分るのである。

(大正九年二月二十日稿了)

## 紹介

### ●圖書

#### ●滿蒙叢書第二冊

第一冊を繼承して口北三廳志の殘餘を收むるに共に、明の金幼孜の著に係り成祖の斃祖征伐に扈從せし時の記録たる北征錄、並に同じく瓦剌の答里巴、馬哈木等を征伐せし紀行なる北征後錄、明の楊榮が成祖に隨ひて阿魯台を討伐せし紀行なる北征記、明の高拱の伏戎紀事、浩の高士奇が聖祖に隨行して直隸遵化州へ往來せし始末を録せし松亭行紀、及同じく扈從して内蒙古へ往來せし紀行なる塞北小鈔、清の張鶴の奉使俄羅斯行程錄、清の錢良の出塞紀略、清の殷化行の西征紀略、清の范昭遠の從西紀略、清の寶璽の奉使三音諾彥記程草、塞上吟、同じく志銳の張家口至烏里雅

蘇、竹枝詞を收む、本文五百六十六頁、解題は文學博士內藤湖南氏の筆に成り滿蒙研究の史料として廣く江湖に勸むべきものなり。

#### ●安龍逸史

屈大均撰

本書は明末の永明王の事蹟に就いて記述せるものにして、王が永曆六年に安隆に駐るや著者屈大均は、番禺即ち廣東の人にして偶學に在りしより善く當時の事情を知り其の見聞する所を記したり、永明王の事蹟を探むとする者は王船山の永曆實錄と共に是非比較一讀すべきなり。

#### ●玉溪生年譜會箋

張采田編

本書は史微の著者張采田が唐の詩人李義山の爲に編せし年譜なり博引旁證、能く其の元和七年初歳より大中十二年四十七歳に至る間の事蹟を論證したれば李義山の生涯を知らむと欲する者には忘るべからざる善本と謂ふべし。

#### ●專誌徵存

羅振玉校錄

本書は漢、魏、晋、夏、北魏、東魏、齊、周、隋、唐、宋、時代の古甄八十一面に就て一一其の寸尺を測り並に其の銘文を精讀記載したるものなり。

#### ●楚州城甄錄

羅振玉撰

楚洲、淮安州、武鋒軍、鎮江軍、淮東轉運司、建康都統司等の甄文を收む

#### ●恒農專錄

羅振玉校錄

本書は主として故端方氏所藏の古甄拓本を以て編輯せし甄錄に